

高崎出身歌人 吉野秀雄

― 病と闘いながら生きた人生 ―

吉野秀雄顕彰短歌大会実行委員会副会長 小川 泰義

(氏名は全て敬称省略します)

はじめに

吉野秀雄は1902年(明治35年)、高崎市新(あら)町に生まれた。生誕百年を記念して行われた行事の一つに、短歌の募集があった。それ以降毎年、吉野秀雄顕彰短歌大会が行われてきた。今年で24回目である。

その大会の副会長であった高崎哲学堂の理事長・故富岡昭晴は吉野秀雄について、「私は高校二年生の夏休みに、新潟県の田舎町にある高等学校から高崎市内の高校に転校してきたばかりの、ちよつとませている文学好きの青年だった」が、高崎高校の同級生は、吉野秀雄を知らなかったと回想している。

「私は吉野の崇拜者かもしれないが(略)、平凡な一市民であつて、ほんの少しだけ、もつと吉野が有名になつてくれればいいのになあ、とやきもきしているにすぎないのだ」というわけで、副会長を引き受けてくれた。その時の会長は、故原一雄。現在の会長は、富岡賢治高崎市長である。

今回、高崎学検定講座の講師を引き受け、さて、どのような話ができるか考えました。私は、群馬ペンクラブ、高崎哲学堂、群馬県ときめき短歌大会でも、吉野秀雄について話しました。

そこで、「吉野秀雄の魅力はどこにあるのだろうか」と思いをめぐらせ、短歌を中心に話していきたいと思ひます。

ただ、6200余首に及ぶ短歌の魅力を言い尽くすことはできない。それで次の観点から、吉野秀雄の短歌を探ることにした。

一、**會津八一との邂逅** 二、**病** 三、**酒** 四、**妻の死** 五、**吉野秀雄と高崎**

また、吉野秀雄の短歌については、『定本 吉野秀雄全歌集』全三巻の中から抜粋した。秀雄は生涯で六冊の歌集を出している。

1, 『天井凝視』303首 大正13年(23歳) 〳大正15年(25歳)

2, 『苔径集』613首 大正15年(25歳) 〳昭和11年(35歳)

3, 『早梅集』405首 昭和11年(35歳) 〳昭和19年(39歳)

4, 『寒蟬集』441首 昭和19年(39歳) 〳昭和20年(44歳)

5, 『晴陰集』1552首 昭和20年(44歳) 〳昭和31年(55歳)

6, 『含紅集』1442首 昭和32年(56歳) 〳昭和42年(66歳)

歌人、吉野秀雄にとつて、會津八一（秋艸道人）との邂逅は欠かすことのできない「歌と人生の原点」の一つである。

秀雄は結核療養二年目（25歳）の病床で、會津八一の歌集『南京新唱』を読み、「作者がどのだれだかまるで存ぜぬながら、世にはこんな純粹清徹な歌を詠む仁もいるものか」と感動、その中の難解な歌二首について教えを請う手紙を書いた。そのうちの一首が、西大寺四王堂の歌である。

まがつみはいまのうつつにありこせどふみしほとけのゆくへしらずも

八一はすぐに返事をくれた。秀雄はその返事を見て、「歯切れのいい候文といい、その一枚漉き和紙四枚に墨書された見事な筆跡といい、絶妙と嘆ずるほかはなく、数金を投じて額に仕立てたのがいまま残っている。（略）わたしは先生の歌にも書にも文章にも、接触した瞬間、いきなり惚れ込んでしまった一人なのである。」と書く。こうして弟子を持たない主義の會津八一の押しかけ弟子となったのである。

吉野秀雄と會津八一の歌について、斎藤茂吉は「清濁」という言葉でその違いを表現したが、八一は、「貴歌（秀雄の歌）及び斎藤君の歌は濁れるところに近代味もあり、かへって面白い」と「気にせらるるには及ばず」と論している。

それでは、八一と秀雄の短歌の清濁の違いはどこにあるのだろうか。

かみつけのしらねのたににきえのこるゆきふみわけてつみしたかむな 八一

北国の夏山のかげにきえのこる雪の荒肌を我はなげかふ 秀雄

たなぐもをそがひになしてあまそそるあかぎのねろはまなかひにたつ 八一

伊香保なる深山の溪になく蟬は日の暮れがたに更にとよめり 秀雄

また、「君の歌は俺の歌の真似をせぬところが好きだ。」「俺も君も野武士みたいなものだが、野武士には野武士の覚悟が必要で、通常人の何層倍も勉強せねばならぬ。相手が自分と同等に見えるときは、まだまだ相手は自分より上にあることを思ひ知るべきである。また歌だけを上達させようとするのは大いなる謬りで、学芸百般の養素を心掛けなければ、歌の高まり深まるわけではない。」とも論している。

吉野秀雄が歌人として立つことを認めたのは、八一が、秀雄の富士の歌を見てからである。

我命をおしかたむけて二月朔日朝明の富士に相对ふかな 八一

きさらぎの浅葱の空に白雪を天垂らしたり富士の高嶺は 秀雄

くしぶるや富士の高秀は天雲をおのが息吹きと巻きかへしつ 八一

吉野秀雄はこのように言っている。

「一昨年（昭和二十年）の春、富士山の歌十数首の叱正を乞うた折、先生は例になくこれを賞讃したまひ、ここにはじめて歌よみの一人として公然世に立ち向かふこと

を許されたのである。」

しかし、富士の歌なら『早梅集』の冒頭にもある。

富士が嶺は奇^くびの山か低^{ひきやま}山の暮れ入る時を赤富士と燃ゆ

(3)

なぜ会津八一は、昭和20年2月の富士の歌を「例になく賞讃」し、歌人として世に出ることを認めたのか。

そこには、妻の死を挽歌として詠い、悲しみのどん底の中から這い上がった生、死に裏打ちされた生があったからではなからうか。ただ挽歌だけで終わってしまったら、歌人吉野秀雄はいなかったかもしれない。

吉野秀雄と會津八一の関係にもう一人大切な人を入れなければならない。それはトライアングルの頂点として、良寛がいるのである。三人に共通しているのが、和歌であり、書であり、そして野人であるという事である。

秀雄の「良寛和尚讚称」の歌の中に、こんな歌がある。

遅魯^{ちろ}訥拙^{とつせつ}頑^{がん}漫^{まん}迂^う癡^ち愚^ぐ鈍^{どん}きみがごときは吾^あが恋ひやまず

(5)

この十文字の漢字一字一字を、八一は皿に焼き付けていた。その皿が、會津八一記念館に所蔵されている。戒名でもないし何だろう。思うに良寛の生き方を現したものでないか。みずからを「大愚良寛」と称したことからも分かるように、秀雄は良寛の生き方を十文字の漢字に託したのだと思う。その心を読み取った八一は、その漢字を皿に焼き付けた。

三人は、歌人・書家・野人として、生き方を共有したトライアングルを形作っていたのである。 3

二、病

吉野秀雄66年の人生は、病との闘いの人生であったといつてよい。(株)吉野藤の吉野藤一郎、サダの次男として生まれた秀雄は、幼少のころから病弱であった。8歳の時、富岡の祖父母の許に移り、富岡小学校に通う。

高崎商業学校に入り、慶応義塾大学経済学部に進学した時、秀雄の運命を変える病魔が襲ってくる。

23歳の秀雄は、肺結核で吐血して帰郷、大学も中退しなければならなかった。以後、国文学を独修、病牀歌集『天井凝視』を80部自費出版する。

暮れなづむ窓にひびかふ蟬のこゑ明日もかくして病むにしあらむ

(1)

この歌は、『天井凝視』の中の秀雄23歳の時の歌であるが、原一雄が高崎市の「広報たかさき」に吉野秀雄の秀歌、50首を連載した最初に取り上げた歌である。「彼はこのように最初から、清らかに澄む高く胸に染みる歌をつくっていたのであった。」と解説しているが、病床にあるものの気持ちはそれだけではない。大学中退、絶対安静の状況の中で深い挫折に襲われていたのである。

病みたふれ時の移るをくやしめりとみに秋づけるけさの朝雨

(1)

あらがへど父はいらへずややありて湿布換へむといひにけるかも (1)

友らみな独り世に立つと勢ふめりわれは常病み猿にかも劣る (1)

吉野秀雄に取りついた病魔は、肺結核だけではない。24歳の8月、乾性肋膜炎の高熱に苦しみ、鎌倉の鈴木療養所に転地。「病状一転好きに向かつて加速度に恢復し続けた」中で、秀雄は、自己の青春についての思いを『天井凝視』の後記で吐露している。

「私は病中屢屢青春の逝くを嘆じて徒なる焦燥を覚えたが、かく回復の時至つて見れば青春は未だ行手に満々として際涯もない。」

しかし、25歳、気管支性喘息を発病。26歳、痔瘻の手術後、大咯血、死に瀕した。

吐きはけどさらにこみあげ胸に鳴る血しほの音に死ぬと定めき (2)

口ごもり経唱へつつわが背をさすり飽かざる母を泣くなり (2)

28歳、感冒から肺炎を起こし、危篤状態になる。

血をはきて一夜明けたる閑けさに身を口惜む涙のこへり (2)

永病みの髪はららかせ吹く風のあはれまつたく春の風なり (2)

23歳から30歳までの吉野秀雄は、「青春は未だ行手に満々」どころではなく、死を枕元に置いた病魔との闘いの連続であった。特に冬の季節は、喘息、肺炎、咯血と彼を苦しめたのである。

わが妻の飲めとすすむることあはれ鯉の生血を日毎にし飲む (2)

うつし身の生死の大事つくづく病めば身に知れ常忘れゐて (3)

30歳代、40歳代の吉野秀雄は、比較的病魔から遠ざかっていたようであるが55歳、咯血して半年療養、糖尿病を併発して入院。この頃になると病魔との闘いだけでなく、老いと死との闘いも加わってくる。

いまさらに事を嘆かむたかぶりもなくて血を吐く老いはわびしき (5)

咯血は七日となりぬ吐きはきていかなりゆく老いの身そらぞ (6)

身に病数重なれば糖尿や結核の如きはつとに忘れつ (6)

吉野秀雄の最後の歌集『含紅集』の「あとがき」に、自分の病気との闘いについて、「わたしは23歳以来の病弱者であるが、まったく動けなくなった晩年の病臥生活は、昭和37年3月からで、ここに満4年半を経た。そしてわたしが今年数へ年⁶⁵であることについて、よくもここまで生きられたものとする感慨の方が強い。本集の特色がもしありとするならば、後半の病床詠においてであるうか。」と記しているように、吉野秀雄の短歌の全編に漂っているものは、やはり彼の病気との闘いではなかったか。吉野秀雄は30歳の時、鎌倉に定住する。庭には、泰山木の木があった。

泰山木のつぼみの光沢は今朝なりしすでに反りたり暗き夕梅雨 30歳

泰山木の淨き蕾は白たまの真玉か松の葉をうつしをり 34歳

病床にからだを振り背なを曲げ泰山木の花の木ずる見る 62歳

泰山木十数花咲くと妻いへどかしらうしろに曲げて見がたく 66歳

吉野秀雄の泰山木への視点は、常に病床からの視点であった。

三、酒

「酒は和洋共によほどわたしの身体に適してゐるとみえ、これによって害をうけた覚えは嘗てなく、糖尿を病んで後はむしろ酒類によって栄養を摂取している観がある。これまた幸運の輩といふべきであろうか。」(『晴陰集』後記)

吉野秀雄の酒好きはよく知られているが、歌集の中ではいつから、どのように詠われているか調べてみた。さすがに『天井凝視』の中では、一首も見当たらない。

『苔径集』に入り、昭和4年の危篤状態を脱した昭和5年(29歳)の時に初めて酒に関する歌が出てくる。酒については、『晴陰集』の後記に書かれているようなものではない。周りの人間はだいたい心配していたのである。ただ「和洋共」とあるように、日本酒であれ洋酒であれ秀雄にとってはいっこう構わなかったようである。

秀雄の短歌の最初の酒の歌が、はつ子夫人の飲酒を戒める歌であったのも「幸運の輩」吉野秀雄をよく表していて面白い。

酒に酔へる我を叱りて愛妻や肺病全快談を読めとわめきつ (2)

『苔径集』は613首の短歌が載っているが、酒に関する短歌は17首で、秀雄と酒の関係が垣間見られて面白い。

たまさかに飲みすぎし酒はたぐりてぞ更けしづむ街をよろめき帰る (2)

肌ぬぎて酒酌みおれば夜を深み暗き小窓ゆ風通ふなり (2)

盗み酒取締られて四五日前より夜の厨房に鍵かかりおり (2)

病むわれを見に來し友は別室に酒飲み肉を食ひて去りけり (2)

『早梅集』の中の酒になると、酒は秀雄の人生哲学となる。

酔ひしれて虚無のごとくに振舞ふをはかながれども度重りぬ (3)

一息に麦酒四本を飲みしとき現しことごとくもはやせまらず (3)

酒に酔へるわれに頭をおしつけて四人の子らの撫でよといふ (3)

『寒蟬集』の中の酒になると、妻を亡くした悲しみとどうしても酔えない自分との格闘になる。

酒飲みてしだいに痺れくるわれをいづくにか別なる我が意識す (4)

酔ひ痴れて夜具の戸棚をさがせども妹が正身に触るよしもなし (4)

酒のみて我は泣くなり泣き泣きて死ににし者の母にうつたふ (4)

『晴陰集』の中の酒になると、貧しさと妻に立たれた自分の運命への悲歌となる。

みだらかに酔ひ痴れぬしが戻りきて四人の子らの寝姿覗く (5)

盆酒に酔ひたかぶりて炎天の街によろめきしきのふのわれよ (5)

貧しさの底にたまたま飲む酒は涙を垂れむばかりにうまし (5)

金を得てビールを出でしが四五分の後するすると飲屋に在りつ (5)

『含紅集』の中の酒になると、老いと死の影が色濃く表れる。

死の影のをりをり差すをわが知れりこよひは酒のあとにやや濃く (6)

病床を起ちて厨に酒を吸ひやしなひの乳とみづからにいふ (6)

菫の花盛れるはブランデーグラスなり酒の香もわが鼻を去りて久し (6)

酒にまつわる吉野秀雄のエピソードは多い。ただ死を目の前にして、「やしなひの乳」も香りを思い出すのみとなってしまう。

四、妻の死

吉野秀雄は、昭和元年25歳の時、小学校以来の友人、栗林はつと結婚する。此の時秀雄は、肺結核で慶應義塾大学経済学部を退学、療養を続けているときであった。「ずいぶん無茶なことのようにだが、ほんとうはけっしてそうでない。学生時代に約束した女性で、病人でもかまわぬからいくといい、まるで看護婦代わりに来てくれた。」と秀雄は晩年に書いている。

二人は、皆子、陽一、壮児、結子の四人の子を育てる。次男の壮児は、父秀雄について、「結核を病んで病弱なのに、無類の酒好き」、母はつ子について、「私の生母はかなり気の強いところがあり、まして四児の母ともなれば女はたいがい強くなる」と『吉野秀雄全歌集』の月報に書いている。

夜ふかく蚊帳の蚊焼くとわが牀を妻はいくたび廻らむものか (2)

うかららのおのれは食はず病む我に日毎食はしむる肉しかなしも (2)

小夜時雨外には降りて病める夜をみとれる妻は疲れはてをり (2)

「はつ子は人一倍丈夫なたちだった」が、胃の肉腫（胃癌）になり、ついに入院することになった。『寒蟬集』は、昭和19年夏の入院より、昭和20年秋に至る一年数ヶ月の出来事を詠んだ歌集である。これにより吉野秀雄は、歌人として世に知られるようになった。

原一雄は、吉野秀雄の秀歌50首を約2年間にわたり「広報たかさき」に連載。五十首の中、十首を『寒蟬集』から取り上げている。これは収録された歌数からみても数が多く『寒蟬集』が秀雄の歌集の中で重要な位置を占めていることが分かる

古畳を蚤のはねとぶ病室に汝がたまの緒は細りゆくなり (4)

これは『寒蟬集』の最初の歌である。戦時下の病院を死に場所とした妻を思うと「身に染みるさびしさであった」と秀雄は言う。

病む妻の足頸にぎり昼寝する末の子をみれば死なしめがたし (4)

「末の子」は数え年9歳の結子である。まだまだ母に甘えたい年頃、なんとしても生きていてほしい。秀雄の絶叫が聞こえてくるようである。

幼子は死にゆく母とつゆ知らで釣りこし魚の魚籃を覗かす (4)

をさな子の服のほころびを汝は縫へり幾日か後に死ぬとふものを (4)

をさな児の兄は弟をはげまして臨終の母の脛さすりつつ (4)

亡骸にとりつきて叫ぶをさならよ母を死なしめて申訳もなし (4)

四人の子供を残してはつ子夫人は42歳の若さで死んでいった。

はつ子夫人と秀雄は、今生の別れにあたってどのような話をしたのだろうか。二人の話がそのまま歌となって残されている。

今生のつひのわかれを告げあひぬうつろに迫る時のしづもり (4)

かの際きわにおのが生涯ひとよをつきつめて幸ひとなして汝はほほゑみし (4)

生きのこるわれをいとしみわが髪を撫いでて最期いまはの息に耐へにき (4)

信ずれば子らを頼むといまさらにあにいはいはめやといひて死にけり (4)

死ぬ妹が無しとなげきし彼岸かのきしを我しぞ信ずなれ汝とあがため (4)

この時の会話は、『やわらかな心』の「前の妻・今の妻」(昭和40年)に詳しく載っている。

最後に、はつ子夫人が亡くなる前の晩の出来事を詠んだ歌を取り上げる。

これは、評論家の山本健吉が昭和50年に出版した『日本の恋の歌』の中で取り上げられたものである。「万葉」から「現代」に至る恋の歌に吉野秀雄の歌がある。

真命まごのちの極みに堪へてししむらを敢あえてゆだねしわぎも子あはれ (4)

これやこの一期いちごのいのち炎ほむら立ちせよと迫りし吾妹わぎもよ吾妹わぎも (4)

ひしがれてあいろもわかず墮だ地獄ぢごくのやぶれかぶれに五体震はす (4)

「これほど厳肅なものとしてよまれた男女交合の歌は、ほかにないのです。しかも、そこには、そのことをおぼめかし、美化して歌おうとする配慮の一点の余地もないのです。その命の合体の一瞬に、いささかの享樂的要素もないのです。なにか根源の生命への欲求、愛憐の情の極致ともいうべきものに促された、せっぱつまった一つの行為であり、それゆえ、それはこのうえなく厳肅なのです。」

(山本健吉『日本の恋の歌』)

昭和19年8月29日、妻に先立たれた吉野秀雄は、「四人の子らをかかえて呆然と生きのこったが、戦争激化の時勢が時勢で、なによりも食糧難に苦しみ、毎日毎日がただただ食くべることだけで手いっぱい」な生活を送らなければならなかった。そのような時、八木重吉の未亡人が紹介された。「とみ子はわたしの兄が知っていて、子らの教育のためにと世話してくれた女性で、前の夫のキリスト教詩人八木重吉が昭和2年に齢わずか30歳で昇天したあと、ミシン裁縫の内職や、白木屋の女店員や、製綿工聯の文書係などをやりながら、遺児二人の養育につとめたが、その子らはあわれにも夭折しそれから数年間茅ヶ崎南湖院の事務員をしていて、19年の末に我が家に移ってきたのだが、なぜ見も知らぬ私のところへ来る気になってくれたものかそこが不思議で、どうも因縁というよりほかはない。」(『やわらかな心』)

うつし世の大き悲しみ三たびまで凌ぎし人は常にやさしき

(5)

わが吐ける生血の器うつはす滌うぎくれし人の情けは身にしむものを

(5)

昭和22年10月26日、八木登美子と再婚。秀雄は誓詞として歌を詠みあげる。

これの世に二人の妻と婚あひつれどふたりは我に一人なるのみ

(5)

恥多きあるがままなるわれの身に添はんとぞいふいとしまざれや

(5)

さだかにはわれは見ねども蒲団皮を剥ぎては綿を妻の売るらし

(5)

おぼほしきわれを見かねて三合の酒買ひに妻は瓶かかへゆく

(5)

吉野秀雄の歌に出てくる色には、特色がある。白、これは白蓮や泰山木、玉簾花に代表されるが、病床の敷布、書道用紙の白も大きく関係している。赤、これはもう吐く血の色である。黒、それは墨や闇だと思う。

わが吐きし血を土にうづめゐる妻よその夕闇に割烹着白く

(5)

五、吉野秀雄と高崎

吉野秀雄は昭和6年（30歳）の時、鎌倉に定住する。そのいきさつを弟の吉野五郎が『回想のなかにある歌人吉野秀雄』で語っている。

「からつ風の吹く乾燥する上州高崎では結核の療養には適さぬとされ、養生院が選ばれた。父の藤一郎がその時高崎で、一、二番を争う財産家であったので、秀雄の病気療養には金に糸目をつけなかった。（略）成人してからの生活は、全部鎌倉での生活であった。」こうして秀雄は、冬のない温暖な鎌倉で病気療養を続けた。「その後秀雄の壮年期の成長が、奇しくも文化都市鎌倉の一員となって文友も多くなつたのである。」

それでは吉野秀雄は、生誕地・高崎、上州をどのように詠っているか。

雑誌「高原」1988年2月号の歌人、荒垣外也の「吉野秀雄故里を歌う」では生まれ育った群馬を歌った作品を取り上げ、歌人吉野秀雄の姿を語っていました。話の最後に、秀雄の「群馬の歌の数は、案外に少なく、範囲も狭いよう」と話していました。上州の自然、地名は秀雄の歌に数多く見受けられます。

高田川水涸れはてて川床のおどろがなかにきりぎりす鳴く

(1)

上毛野かみつけぬ鏑かぶらの川つよかせの強風にまぎれず鳴ける真夏うぐいす

(1)

『苔径集』になると、「上州前橋桑原病院」「上州倉賀野」「上州伊香保榛名」

「上州鏑川桐淵橋」「上州神農原村蛇崩行」「上州富岡」「上州榛名山新秋」

「上州高崎公園」と、「上州人・吉野秀雄」面目躍如たるものがある。

上州高崎公園

白木蓮花おとろふる下に花屑を掃く人をりて園はしづけし (2)

はるかなる三国の雪は一目見よ春ふかくして瑠璃にかがよふ (2)

榛名湖畔淹留吟

湖岸にひよわき吾子が手をひけりむかしのわれとわが父に似て (3)

右いかほ左あがつま善光寺道秋雨そそぐ石の道しるべ (3)

たらちねの母（昭和20年11月22日、母高崎にて逝く。享年67）

霜月のひかりすがしき聖石橋母の柩はいまわたりゆく (4)

柩挽く小者な急きそ秋きよき烏川原を母の見ますに (4)

『晴陰集』になると、高崎市内の歌碑の歌や吉野秀雄の「望郷」の歌が収録されている。

三つの山空の三隅に吹き晴れてわが上毛に年立つらしも (5)

前橋の高橋元吉まさきくや赤城の山と共に恋しき (5)

富岡に我は育ちき製糸場の冬の夜明けの笛寒かりき (5)

高崎を出でて二十年国びとの何語るべき事もせなくに (5)

吉野秀雄は、赤城・榛名・妙義の三山に囲まれた高崎に生まれ、病と闘いながら「生活に密着して、経験的事実をありのままに率直に感受する。：一切の無駄を排除し、ひたすら簡潔に、直線的に、唯一息に言い下す」独自の歌風を作り上げた。吉野秀雄は、死を目の前にして、「歌が自分の生を鼓舞するのであった」と言う。

おわりに

最後に、吉野秀雄ほど歌碑が多く建てられている歌人は少ない。吉野登美子著『わが胸の底ひに』によれば、昭和五十年五月、新潟県三条市に建てられた歌碑が第十五号だそうである。その後、佐渡市、出雲崎町、柏崎市、上越市と歌碑が建立され（阿部松夫氏調査）、平成二十五年七月、新潟市萬代橋近くのやすらぎ堤に第二

十八号の歌碑が建立された。吉野秀雄顕彰短歌大会の副会長である、故佐野進によれば、「秀雄の歌碑は生前二基建てられ、昭和四十二年七月十三日、満六十五歳で逝去され、翌年一周忌の法要が行われた際、鎌倉の瑞泉寺の山門に建立された「死を厭いとひ生をも懼おそれ人間の揺れさだまらぬ心知るのみ」が、三号歌碑だと調査されている。

吉野秀雄二十八基の歌碑の分布

○一基	長野、東京、静岡、愛知
○二基	神奈川、岐阜、奈良、高知
○八基	新潟
○八基	群馬
高崎以外（四基）	
榛名湖畔	一基
富岡市	二基
安中市	一基
高崎市内（四基）	
高崎公園	
高崎問屋町公園	
高崎商業高等学校正面玄関前	
高崎新町岡源料亭玄関前	

高崎市高崎公園（第四号碑） 昭和四十三年七月建立

白木蓮はくれんの花の千万青空に白さきとみてしづもりしづもりにけり

高崎問屋町公園（第十三号） 昭和四十八年十月建立

ふた方に浅間白根しろねの噴きげむり直立すぐたつかもよゆく春の空

高崎商業高等学校正面玄関前（第二十四号） 平成七年九月建立

夕立雲逆巻きおろす杉原に鳴きて鋭し山時鳥

高崎市新町・岡源前庭（第二十五号） 平成七年十一月建立

童より父に伴れられし料亭の岡源いよよ榮ゆる好し